

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26293479

研究課題名(和文) 認知症高齢者の長期療養を専門職連携実践で支える研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a training program to support long-term care for older adult with dementia

研究代表者

大塚 真理子(Otsuka, Mariko)

宮城大学・看護学群・教授

研究者番号：90168998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、認知症を持つ高齢者の長期療養を支援することを目指した研修プログラムを開発した。対象者は地域で認知症ケアに携わる多職種で、専門職連携実践(Interprofessional work: IPW)の考え方によるプログラムとした。評価は、受講者の変化と波及効果を指標とした。受講者のIPW実践力の自己評価は、研修前より約1年後の方が高くなった。波及効果は、「地域で多職種連携の研修が開催されるようになった」「研修教材である認知症高齢者の長期療養シートが市の認知症ケアパス改訂に影響を与えた」等であり、本研修プログラムは、地域の多職種が連携して認知症ケアを担う人材育成に貢献することが確認された。

研究成果の概要(英文)：In this study, we developed a training program aiming to support long-term care of older adult with dementia. The participants were multi-occupation professionals involved in dementia care in the community, and programs were based on the idea of interprofessional work (IPW). Evaluation of the program was conducted based on changes in IPW competency of participants and influences effect on the community. The participants' IPW competency was higher in a year after training. The spreading effects on the community included "training for multidisciplinary cooperation came to be held in the community", "the long-term care sheet for dementia older adult, which were training materials, influenced revision of care pathways for dementia of the city" and so on. It was confirmed that the training program developed in this study contributes both directly and indirectly to personnel development that collaborates with dementia care in the community.

研究分野：老年看護学

 キーワード：認知症ケア 継続ケア 多職種連携 専門職連携教育 人材育成 地域包括ケア 研修プログラム
IPE/IPW

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知症施策の動向と多職種連携の必要性
厚生労働省は、2013年度から認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)を策定し実施している。これは病院・施設を中心とした認知症ケア施策をできる限り住み慣れた地域で暮らし続けられる在宅中心の認知症施策へのシフトを図ろうとするものである。標準的な認知症ケアパスの作成・普及、認知症の早期診断・発見、地域での生活を支える医療・介護サービスの構築、医療・介護サービスを担う人材の育成等の取り組みである。すでに各地で認知症ケアコーディネーター養成(認知症介護研究・研修東京センター2012)が始まっている。

認知症ケアコーディネーターは「認知症の人とその家族に一貫して継続的に対応し、必要な医療や介護サービスの情報提供とともに、関係者間の調整を図る等支援のトータルコーディネート」をする人と位置付けられている。認知症高齢者が、在宅で暮らしながら一時的に入院や入所をして長期療養を続けていくうえでキーパーソンとなる人材であり、その育成は喫緊の課題である。しかしながら、認知症ケアコーディネーターが機能するためには、病院や介護施設内、居宅サービス事業所内で外部との連携窓口となる人材に連携力が必須となる。

すなわち、連携は双方向のものであり、認知症ケアコーディネーターとともに、地域に存在する認知症高齢者ケアに関わる多機関の窓口となる人材の連携力を高めなければならない。また、認知症高齢者が一時的に入院・入所する施設内では、その目的を達成し質の高いケアを継続して提供することが求められており、そのためには各施設内で認知症ケアに従事している多職種の連携力を高めることが不可欠となる。

認知症高齢者の長期療養を支えるには、認知症高齢者が暮らす地域において、施設内と施設間及び在宅と病院・施設のケアがシームレスに継続し、かつ統合的なケアに発展していくことが求められている。

(2) 日本における IPW とその研究課題

IPW は Interprofessional Work の略称であり、専門職連携実践、多職種連携、多職種協働などと訳されている。IPW を担う人材育成は専門職連携教育であり、Interprofessional Education (以下 IPE) として体系化されつつある。

IPW/IPE は、英国の専門職連携教育推進センター (Centre for the Advancement of Interprofessional Education; 以下 CAIPE) が中心となって理論化や普及が行われており、世界保健機関 (WHO) が推進している (2011)。

日本には、2005 年頃から保健医療福祉の基礎教育機関で導入されるようになり (埼玉県立大学 2009)、その成果が明らかになって

いる (大塚 2011)。基礎教育での IPE ばかりでなく、保健医療福祉現場の IPW や現任者への IPE についても実践や研究が報告されている (伊藤 2013, 酒本 2013, 小野寺 2011)。

しかしながら、認知症高齢者の長期ケアでは、連携力の高い施設内人材の育成のみではなく、地域に存在する病院や介護施設内とそれら機関の機関間連携を担う人材育成が課題であり、一地域全体で、認知症高齢者ケアに携わる多専門職の連携力を高め、IPW を促進する人材育成に取り組んだ研究は見当たらなかった。

また、IPW/IPE の国際的な研究課題はその評価である。専門職の IPW 自己評価に関する研究 (Brett Williams 2012, 山本 2012) はあるが、多職種が連携協働したケアの提供を受ける当事者からの評価は、不可欠であるものの明らかにはなっていない (Scott Reeve 2012)。

(3) 保健医療福祉系専門職の現職者研修の方法と評価方法

本研究では、保健医療福祉系の専門職を対象とした研修方法として経験学習理論 (松尾 2011) と用いる。松尾は「経験から学ぶ力のモデル」として「思い」と「つながり」を大切に「ストレッチ・リフレクション・エンジョイメント」を持って経験から学ぶことを提唱している。IPW 研修は、異なる職種が一緒に研修を行うので、模擬 IPW という体験を取り入れた経験学習理論が有効と考えられる。

また、新しい取り組みを実践の場に取り入れていくための理論として、普及学 (エベット・ロジャース 2007) を用いる。ロジャースの普及学はイノベーションの普及方法論である。IPW というイノベーションを研修参加者が学修し、実践現場に持ち帰って普及できるように普及学の研修手法を取り入れることが有効と考える。

さらに、IPW 研修プログラムの評価は IPE のアウトカム評価を、カークパトリックのフレームワーク (Kirkpatrick 2006) を用いる。この評価方法は、研修効果の個人への影響範囲と組織への影響範囲をとらえるものである。研修プログラムの評価のレベルによって評価方法は異なる。個人への影響範囲であるレベル 3 は、開発中の IPW 自己評価尺度を用い、組織への影響範囲であるレベル 4 は認知症高齢者と家族である当事者から得るなどの工夫が可能である。

【引用文献】

Brett Williams (2012): Construct validation of the readiness for interprofessional learning scale: Journal of Interprofessional Care, 26: 326-332.

Donald L. Kirkpatrick, James D. Kirkpatrick (2006): EVALUATION TRAINING PROGRAMS-3ed

Ed., Berrett-Koehler Publishers, 21-26.

エベット・ロジャース著，三浦利雄訳
(2007): イノベーションの普及

伊藤美智子 (2013): 多職種連携を促進する現任者を育成するカリキュラムの一考察，第6回保健医療福祉連携教育学会。

松尾睦 (2011): 職場が生きる人が育つ「経験学習入門」ダイヤモンド社。

認知症介護研究・研修東京センター (2012): 認知症地域支援推進員研修における効果的な人材育成のあり方に関する研究報告書。

大塚真理子 (2011): 埼玉県立大学における IPE の歩み，保健医療福祉連携，4 巻 2 号，1-9。

小野寺由美子 (2011): IPW の視点から見た看護職現任教育プログラムの課題，保健医療福祉連携，3 巻 2 号，P.94。

埼玉県立大学編 (2009): IPW を学ぶー利用者中心の保健医療福祉連携

酒本隆敬・大塚真理子 (2013): 専門職連携教育 (IPE) の受け入れにより生じた職員の行動変容と介護現場における専門職育成の取り組み，認知症ケア事例ジャーナル，第6巻第1号，P.72-80。

Scott Reeve (2008): Interprofessional education: effects on professional practice and health care outcomes, Jan 23;(1).

WHO (2011): WHO Patient Safety Curriculum Guide: Multi-professional Education。

山本武志他 (2012): 日本語版 Attitudes toward Health Care Teams Scale の信頼性・妥当性の検証，保健医療福祉連携，5 巻 1 号，21-27。

2. 研究の目的

本研究の目的は，認知症高齢者が入院する地域中核病院のチーム医療と介護施設内の多職種協働及び地域の多機関間連携を促進する人材を養成するための，専門職連携実践 (Interprofessional Work; 以下 IPW) の研修プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

A 県 B 市 C 地区を研究フィールドとして，リーダー研修は，認知症高齢者の長期ケアを支える病院・介護老人保健施設・地域のクリニック及び居宅サービス事業所に所属する多専門職を対象とした。病院研修は，院内の多職種を，地域の研修では介護支援専門員を対象とした。地域への波及効果については，評価会議の構成員である県・市の認知症担当職員，病院の看護部長，地域包括支援センター所長，クリニックの院長，訪問看護ステーション所長，家族の会長等を対象とした。

(2) 研修プログラムの作成

CAIPE が中心となって理論化や普及が行

われている，Interprofessional Work (以下 IPW) 及び Interprofessional Education (以下 IPE) の考え方にに基づき，我々が実施してきた「専門職連携・協働講座」を基に，IPW 研修プログラムを作成した。また，経験学習理論と普及学の手法を加え，研修対象者のレディネスに合わせて研修内容を検討した。

(3) 評価方法

カークパトリックの教育評価理論を用いて，研修参加者に対する評価は，研修前 (ベースライン調査) と研修後約 1 年後 (アウトカム調査) を実施した。調査項目は，開発中の IPW 自己評価尺度などを用いた。研修の波及効果として，病院組織への影響や地域の多職種への影響などについて，評価会議を組織し，定期的な研修結果報告を行って，波及効果等の評価を得た。

4. 研究成果

(1) IPW 研修プログラムの構成

リーダー研修プログラム

研修目的は，地域の認知症高齢者の長期療養を連携協働して促進する理論的知識と IPW 研修の企画運営の知識と技術を学ぶこと，地域の多機関多職種と顔の見える関係をつくりネットワーク構築の機会とすることであった。研修内容は，講義 (50 分)，チーム作り (チーム知恵の輪; 20 分)，認知症高齢者の長期療養のプロセスを支える多機関多職種の全体像を描く演習「オリジナルのシート使用」(60 分)，連携協働した認知症ケアの質向上の方策検討の演習 (80 分) から成り，所要時間計 7 時間である。

病院内研修プログラム

院内の中堅多職種を対象にした合同研修は，認知症高齢者の療養支援のあり方に関する講義と自施設での支援策を目標指向型で導出する演習で構成され，計 3 回実施した。リーダー研修終了者と研究者とともに研修プログラムを開発し「一般急性期病院における多職種一体型のケアを普及・発展させる価値観を醸成する教育プログラム」とした。

介護支援専門員研修プログラム

介護支援専門員が IPW の必要性を理解し，サービス担当者会議における IPW の意味を考えることをねらいとして，「サービス担当者会議をとおして多職種連携 (IPW) 力を身につける～認知症高齢者の長期療養を IPW で支えるために～」をテーマとした。認知症の進行に応じて利用できる支援の確認と多職種連携についての講義，及びサービス担当者会議を開催する時期や課題，IPW について感じていることをテーマとしたグループワークで構成した。

(2) IPW 研修プログラムの評価

研修直後と 1 年後の評価

リーダー研修の直後では，チーム作りについて，「楽しさ」「真剣さ」「話しやすい雰囲気」があり，「その後の演習につながるチー

ム形成」ができた」と評価された。チーム作りを通して「共同作業の難しさ」「コミュニケーションの大切さ」「一つの目標に向かう団結力」「知恵を出し合うことの重要性」を学んだ。全体像を描く演習では、「認知症の段階を追った検討」の経験から、「他職種の考えや多様な視点を知れた」「長期療養の全体像がイメージできた」とされ、「自分の役割課題が明確になった」と評価された。一方で「自分の視野の狭さへの気づき」「知識不足の実感」「関わっていないというしるめたさ」を感じていた。認知症ケアの質向上の方策検討の演習について、「具体的な方策の検討」により、「一緒に悩める人がいることで安心した」「前向きな話ができよかったです」と評価された。

これらから、経験学習という教育手法を取り入れた成果があったと考えられ、研修直後のねらいは達成できたと評価した。

また、1年後のIPWに対する自己評価の比較では、全体的にIPWに対する自己評価は高く、研修により職種、経験年数、年代の差は少なくなった。研修後、他職種とのコミュニケーションや他機関への関心の高まりなど自身については変化を実感していた。しかし、患者・家族・サービス利用者、施設職員や地域の専門職の満足感や評価などについては明確な手ごたえがない様子であり、他者評価を実感できる指標づくりが課題となった。

病院内研修の評価

IPWに対する自己評価で、「認知症の高齢者および家族が必要なケアを受けられるように調整する」、「多職種で行う援助活動を計画する」、「必要に応じて専門職同士が話し合いをもつように働きかける」、「専門職同士のやりとりで議論の内容が整理できるような方法を提案する」の4項目で正の方向に有意に変化した。理想とする目標を共有し、達成の方策を導出する研修は、支援策を主体的に創造する経験となり、個の発想が活かされる連帯を実感できると考えられた。

介護支援専門員研修の評価

研修に参加した介護支援専門員は研修受講前からIPWを実践していると自己評価しており、研修後も概ね同様の評価であった。研修前は有意に評価が低かった「議論整理の仕方の提示」は、研修後調査で有意差が認められなくなった。これは、カンファレンス等で議論の整理方法の提案が不足していたことを自ら認識し、行動の変容が起きたと推測された。一方、前後比較で有意にマイナスの変化が見られた「不完全な思いの共有」は、不完全な思いの共有もIPWコンピテンシーであることを研修によって認識し、研修後の日常業務の中で行動不足を認識したと考えられた。

波及効果

評価会議は4年間の研究期間に3回開催し、最終回では本取り組みの波及効果について

意見を得た。研修を実施した病院では、IPWを推進するコアメンバーが育ち、継続研修をコアメンバーが中心となって実施していくこととなった。本研究による3つの研修以外にも、評価会議の参加者によって多職種連携の研修が開催され、継続するようになった。また、研修教材として作成した認知症高齢者の長期療養シートがB市の認知症ケアパスの改訂に影響を与えた。本研修プログラムは直接的・間接的に地域でのIPWによる認知症ケアを促進する人材育成に貢献することができた。

(3) IPW 研修プログラムの活用

本研修プログラムの骨格はリーダー研修のプログラムである。本研修のオリジナルとして開発したワークシートは、これを用いて、「認知症高齢者と家族の長期療養を支える多機関・多職種の全体像」を多職種チームで作成するワークが可能となり、どの研修でも創意工夫をして活用することができた。また、IPW自己評価尺度や退院支援カンファレンスDVDを開発した。これらは、専門職が自分のIPWの実践力を振り返ることや、実践を客観的に分析する教材としてもその有用性が確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

田中敦子, 大塚真理子, 丸山 優: 認知症に伴う行動・心理症状がみられた高齢者の歩行および排泄の介護度の変化—開放型病床から退院した患者の後向視的解析。自立支援介護学, 査読有, 10(2), 152-161, 2017。
國澤尚子, 大塚真理子, 丸山優, 畔上光代: IPW コンピテンシー自己評価尺度の開発(第2報) - 病院に勤務する保健医療福祉専門職等全職員のIPW コンピテンシーの測定 - 保健医療福祉連携, 査読有, 10(1), 2-18, 2017。

國澤尚子, 大塚真理子, 丸山優, 畔上光代: IPW コンピテンシー自己評価尺度の開発(第一報) - 病院に勤務する中堅の専門職種への調査から。保健医療福祉連携, 査読有, 9(2), 141-156, 2016。

大塚真理子: チーム医療を「絵に描いた餅」にしない! 多職種連携実現メソッドとしての専門職連携教育とIPWコンピテンシー活用による教育・実践イノベーション。看護部長通信, 査読無, 2016(4・5月号), 78-84, 日総研, 2016。

大塚真理子: 専門職の連携協働による認知症高齢者の家族支援 IPE/IPW の促進によるケアの向上を目指して。日本認知症ケア学会誌, 査読無, 13(3), 568-578, 2014。

[学会発表](計 26 件)

國澤尚子,大塚真理子,丸山優,畔上光代: 病院に勤務する中堅者の IPW コンピテンシー自己評価尺度の検証 - 認定看護師の特徴 -. 第 37 回日本看護科学学会学術集会プログラム集, 69, 2017 .

丸山優,田中敦子,大塚真理子,畔上光代,菊地悦子,國澤尚子: 一般急性期病院における認知症高齢者を支えるケア -. 第 37 回日本看護科学学会学術集会プログラム集, 68, 2017 .

國澤尚子, 鶴岡浩樹, 菊地悦子, 木戸宜子, 畔上光代, 須賀夏子, 丸山優, 辻玲子, 田中敦子, 大塚真理子: 認知症高齢者の退院前模擬カンファレンス動画教材のファシリテータ研修への活用. 第 10 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会抄録集, 68, 2017 .

鶴岡浩樹, 木戸宜子, 菊地悦子, 畔上光代, 國澤尚子, 須賀夏子, 丸山優, 辻玲子, 田中敦子, 大塚真理子: 模擬カンファレンスを利用した専門職連携教育の同が教材の開発 - 認知症高齢者の退院前カンファレンスを例に -. 第 10 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会抄録集, 67, 2017 .

木戸宜子, 鶴岡浩樹, 畔上光代, 丸山優, 須賀夏子, 辻玲子, 菊地悦子, 田中敦子, 國澤尚子, 大塚真理子: 地域における認知症高齢者の長期療養を支える IPW に向けた取り組みと課題 - 介護支援専門員がサービス担当者会議で取り上げる課題から -. 第 10 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会抄録集, 47, 2017 .

丸山優, 田中敦子, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 一般急性期病院で認知症高齢者を支えるケアの検討. 日本老年看護学会第 22 回学術集会, 147, 2017 .

田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 一般急性期病院の開放型病床における認知症高齢者の退院支援. 日本老年看護学会第 22 回学術集会, 146, 2017 .

田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 開放型病床における認知症高齢者の退院支援の構造 - グループインタビューによる質的分析 -. 第 18 回日本認知症ケア学会大会, 257, 2017 .

丸山優, 田中敦子, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 開放型病床における認知症高齢者のより良い退院を実現させるケア環境 - 看護師へのグループインタビュー調査から -. 第 18 回日本認知症ケア学会大会, 257, 2017 .

菊地悦子, 辻玲子, 大塚真理子, 田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹: 急性期医療を担う地域中核病院

における認知症高齢者の長期療養を支える多職種連携. 第 18 回日本認知症ケア学会大会, 233, 2017 .

Etsuko Kikuchi, Reiko Tsuji, Mariko Otsuka, Mitsuyo Azegami, Naoko Kunisawa, Yu Maruyama, Natsuko Suka, Atsuko Tanaka. : Necessary Elements of Interprofessional Work in Discharge Support for Elderly Patients in Dementia from Acute-Care Hospitals. 20th East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS), 56, 2017 .

田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 認知症高齢者の退院支援を担う開放型病床の看護師の特徴 - グループインタビューによる質的分析を通して -. 日本認知症ケア学会 2016 年度東北地域大会, 19, 2016 .

須賀夏子, 大塚真理子, 畔上光代, 辻玲子, 丸山優, 國澤尚子, 田中敦子, 菊地悦子, 鶴岡浩樹, 木戸宜子: 認知症の人の家族介護者からみえた長期療養における専門職連携とその評価 - 家族介護者へのインタビュー調査を通して -. 第 17 回日本認知症ケア学会, 237, 2016 .

田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 畔上光代, 辻玲子, 菊地悦子, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 開放型病床に入院した認知症高齢者の様相 (第 3 報) - 入退院の経路における歩行と排泄に関する介護度の変化 -. 第 17 回日本認知症ケア学会, 260, 2016 .

丸山優, 田中敦子, 須賀夏子, 畔上光代, 國澤尚子, 菊地悦子, 辻玲子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 大塚真理子: 開放型病床に入院した認知症高齢者の様相 (第 2 報) - 内科的治療目的で自宅から入院した認知症群と非認知症群の比較 -. 第 17 回日本認知症ケア学会, 260, 2016 .

大塚真理子, 田中敦子, 丸山優, 須賀夏子, 菊地悦子, 辻玲子, 畔上光代, 國澤尚子, 木戸宜子, 鶴岡浩樹: 開放型病床に入院した認知症高齢者の様相 (第 1 報) - 入退院時の状況の比較から -. 第 17 回日本認知症ケア学会, 259, 2016 .

Azegami M, Tsuruoka K, Kido N, Kunisawa N, Kikuchi E, Maruyama Y, Suka N, Tsuji R, Tanaka A, Otsuka M: Factors Impeding Interprofessional Collaboration in Hospital Discharge Support Conferences for Elderly People with Dementia. 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 7, 2016 .

大塚真理子, 畔上光代, 須賀夏子, 辻玲子: 認知症の家族介護者からみた長期療養における専門職連携の評価 - 家族介護者へのインタビュー調査で得た一事例のプロセスから -. 認知症ケア学会 2015 年度関東 1 地域大会, 23, 2015 .

- 大塚真理子：専門職連携教育が目指している高齢者ケアを担う専門職の姿 - 看護師が加わるチームでは - . 第 29 回日本老年学会総会合同大会(招待講演),16,2015 .
 木戸宜子, 鶴岡浩樹, 畔上光代, 大塚真理子：認知症高齢者の長期療養を支える IPW に向けた取り組みと課題 - 地域支援関係者への聞き取り調査から . 第 8 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会 ,52,2015 .
- 21 國澤尚子, 大塚真理子, 丸山優, 畔上光代, 須賀夏子, 山岸紀子：IPW コンピテンシー尺度開発(4)対象者の変化の測定 . 第 8 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会 ,51,2015 .
- 22 國澤尚子, 大塚真理子, 丸山優, 畔上光代, 長谷川真美, 新井利民：IPW コンピテンシー尺度の開発(3) . 第 7 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会抄録 ,84,2014 .
- 23 丸山優, 大塚真理子, 畔上光代, 國澤尚子, 長谷川真美, 新井利民：IPW コンピテンシー自己評価尺度開発に向けた検討—天井効果, 床効果が見られた項目の所属施設による比較 . 第 7 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会抄録 ,88,2014 .
- 24 Otsuka M ,Kunisawa N ,Maruyama Y ,Azegami M : Examination of the environmental factor to promote IPW . All Together Better Health ,49,2014 .
- 25 大塚真理子：認知症の人の在宅介護 . 日本認知症ケア学会誌 ,13(1),91,2014 .
- 26 辻玲子, 大塚真理子, 野呂牧人, 高橋佳克, 諏佐紀恵子, 上田さより：認知症ケア事例検討会の研修評価に関する研究 . 日本認知症ケア学会誌 ,13(1),265,2014 .

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

大塚 真理子 (OTSUKA, Mariko)
 宮城大学・看護学群・教授
 研究者番号：90168998

(2)研究分担者

鶴岡 浩樹 (TSURUOKA, Kouki)
 日本社会事業大学・福祉マネジメント研究

科・教授

研究者番号：20306137

木戸 宜子 (KIDO, Noriko)

日本社会事業大学・福祉マネジメント研究科・准教授

研究者番号：80386292

丸山 優 (MARUYAMA, Yu)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：30381429

辻 玲子 (TSUJI, Reiko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：20644470

畔上 光代 (AZEGAMI, Mitsuyo)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教

研究者番号：40644472

水間(須賀) 夏子 (MIZUMA, Natsuko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教

研究者番号：00740193

菊地 悦子 (KIKUCHI, Etsuko)

武蔵野大学・看護学部 准教授

研究者番号：90307653

張 平平 (CHO, Heihei)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：90436345

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

國澤 尚子 (KUNISAWA, Naoko)

医療生協さいたま地域社会と健康研究所・副所長兼主任研究員

田中 敦子 (TANAKA, Atsuko)

東洋大学人間科学総合研究所・客員研究員